

高卒進路

2025 秋号
Vol.15

大特集

高校新卒就職者は
なぜ増えているのか？

特集

埼玉県立川口工業高等学校
掃除部から学ぶ、
就職に強い理由

恩師への手紙

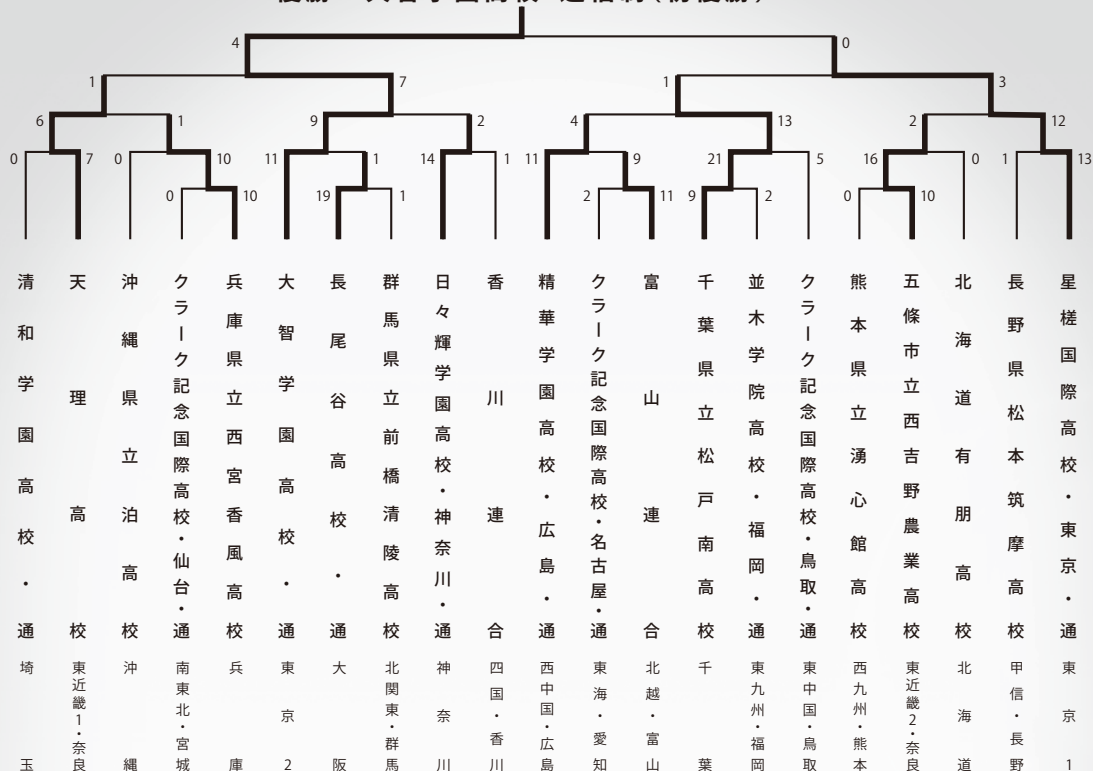
「高卒就職」を

「早活キャリア」へ

「高卒就職に「進学」を超える魅力を生み出す考え方」

第72回全国高等学校校定時制通信制軟式野球大会レポート
プレ職場見学博 2025 レポート

優勝 大智学園高校・通信制(初優勝)



攻守で存在感を示した大智学園高校エース渡邊。

9-2、7-1、そして決勝は4-0。大会全体での失点はわずか4点だった。最大の武器は、鍛え上げられた守備と隙のない連携。昨年、決勝で涙をのんだ投手・渡邊と捕手・辻のバッテリーは、冷静な投球と配球で相手打線を封じ込め、守りからリズムをつくった。攻撃では2回に先制し、4回に追加点。終盤9回には集中打でさらに2点を奪い、試合を決定づけた。

くったが、大智学園高校の守備は最後まで崩れなかった。9回、内外野の間に上がった打球に「ポテンヒットか」と誰もが息をのんだ瞬間、二塁手が懸命に飛び込み、スライディングキャッチ。すでにスタートを切っていた一塁走者も、鋭い返球に阻まれてダブルプレー。鉄壁の守備が、試合に終止符を打った。「4度目の挑戦」でつかんだ初の日本一。最後のアウトが告げられた瞬間、涙を浮かべながら抱き合った選手たちの姿は、まさに「悲願」という言葉がふさわしかった。

大会レポート

初出場から
3年連続
準優勝

大智学園高校が「4度目の挑戦」で悲願の初優勝

第1回大会が開催されたのは1954年（昭和29年）。全日制高校と同じようにスポーツを通じて成長する場を提供することを目的に創設された大会も、今年で第72回を迎えた。コロナ禍で中止となった第67回大会以降、長らく明治神宮野球場での決勝は実現していなかった。しかし今年、6年ぶりに決勝の舞台が聖地・明治神宮野球場に戻ってきた。

8月23日、最高気温は35度を超える酷暑。観客の視線が注がれたのは、初出場以来、毎年決勝に進むも3年連続で涙をのんできた大智学園高校だった。対する相手は、過去に決勝で大智学園高校を下したほか、それまで不動の王者であった天理高校の連覇を阻止して日本一の座をつかんだことのある強豪・星槎国際高校。

互いに通信制高校であり、東京都代表同士の運命的な対決は、4-0で大智学園高校が完封勝利を収め、悲願の初優勝で幕を閉じた。

やっとの想いでつかんだ日本一

大智学園高校は2022年（第69回大会）に初出場して以来、毎年決勝へ駒を進めてきた「大躍進」のチームだ。しかし、そんな華々しい戦績の裏には、あと一歩で届かなかった悔しさが幾度となく積み重なっていた。指揮を執る金子良亮・横地颯両監督と選手たちは、その悔しさを力に変え、地道な練習を重ねてきた。

練習環境は決して恵まれていない。サッカー部と共用のグラウンドは狭く、平日はフリーバッティングも、外野と内野が連携する動きもままならない。実戦形式の練習ができるのは、週末の限られた時間だけ。それでも金子・横地両監督は「与えられた環境の中でどう頑張るかが大事なんだ」「休まず練習に参加するは約束事にしよう」と言い続け、選手たちの意識を少しずつ変えていった。

その鍛錬の日々が、今年ついに花開いた。初戦から11-1、

12345678910
0100000100201
00110002010



優勝チームの監督・主将に聞く

「通信制だからできない」

大智学園高校
初優勝の舞台裏

なんて絶対にない。

「通信制だからできないではなく、やればできる」を学んでほしい。どんな環境でも、本気でやれば人は必ず成長できる」――。

そう語るのは、大智学園高校の校長であり、野球部を率いる金子総監督。4度目の挑戦でついに手にした初優勝の原点には、『部活動＝教育の場』という熱い理念があった。

定時制や通信制には、多様な背景を持つ生徒が集まる。学習や生活でつまづいた経験のある生徒も少なくない。しかし金子総監督は「どんな境遇であれ、部活動から得られる楽しさや大変さ、充実感、仲間の尊さは同じ。大事なものはどこで」ではなく「どう」頑張るか。できない理由ではなく、できる方法を考えて

行動してほしい」と伝え続けてきた。

その理念は日々の練習にも息づく。先輩も後輩も、試合に出る者も出ない者も、全員が同じメニューに取り組み、準備や片付けも共に行う。勝利だけを追うのではなく、野球を通じて仲間と努力の尊さを知ってほしい――。その思いが、生徒を選手として、人として大きく成長させた。

一方、横地監督が徹底したのは『休まず練習に参加すること』



学校長、兼総監督
金子 良亮
(かねこ りょうすけ)

だった。「限られたチャンスをつかむのは、地道に練習を積み重ね、仲間からの信頼を得た選手だけだ」と伝えてきた。大会では、ベンチもサポートも一丸となって声を張り上げた。横地監督は「試合を重ねるごとに、声掛けの質やチームの一体感が増した」と手応えを語る。特に、昨年悔し涙を流したエースの渡邊は、誰よりも大きな声で仲間を鼓舞し、気迫あふれるプレーでチームを引っ張った。

学んだのは『仲間を信じる心』

「ワンチームで挑むこと。仲間の意見を素直に聞き、ときには頼ることを大切にしました」と振り返るのは主将の辻。ミスは引きずらず、表情や態度に出さな

い。声を出し続け、あえて脇役に徹することで、チームの一体感をさらに高めていった。

――創部当初は、部員わずか5人。週1回の練習から始まったチームが全国の頂点に立つまでに成長した。『与えられた環境でどう頑張るか』が人を強くする――金子総監督の言葉を、選手たちは見事に体現した。

通信制や定時制の部活動には多くの制約がある。しかし、その中で培った『やり抜く力』や『仲間を思う心』は、進学や就職といった次のステージでもきつと大きな支えとなる。辻は言う。「うまくいかないときでも、仲間を信じて行動すれば必ず結果につながる」。その信念は、グラウンドを離れても、これからの人生を照らす指針となるだろう。



監督
横地 颯
(よこち はやて)



主将
辻 順夫
(つじ なお)

第72回



全国高等学校定時制 通信制軟式野球大会

熱戦レポートは
26ページ
からの記事を
ご覧ください!

大智学園高校野球部の皆さん 優勝おめでとうございます!



第72回全国大会の概要

- 【期 日】 令和7年8月20日(水)～23日(土)
- 【場 所】 明治神宮野球場、駒沢オリンピック公園硬式野球場、オーエンススタジアム江戸川(江戸川区球場)、スリーボンドスタジアム八王子(八王子市民球場)
- 【主 催】 全国高等学校定時制通信制軟式野球連盟、(公財)全国高等学校定時制通信制教育振興会、東京都教育委員会
- 【後 援】 スポーツ庁、厚生労働省、全国高等学校長協会、全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会、(公財)日本高等学校野球連盟、(公財)全日本軟式野球連盟、朝日新聞社、日刊スポーツホールディングス、日本放送協会、トップインターナショナル株式会社
- 【特別協賛】 大塚製薬株式会社、ミズノ株式会社、株式会社ハリアー研究所
- 【出場校】 各都道府県・各地区代表1校(ただし、東京都および前年度優勝校の都道府県・地区は2校) 計22校

ハリアー研究所は定通軟式野球大会を応援しています!

ハリケンナビ